

## 遠い記憶・満州

神奈川県 守屋 義 正

はじめに

会社を定年退職後にいろいろなサークルに参加すると、必ず最初に自己紹介があつて、出身地の話が出る。私は「東京」と答えると、すぐに「生まれは？」と聞かれる。そのときは、一瞬考えてから「満州です」と言うが、あまり反応が無い。それもそのはずである。あれから六十数年が過ぎているのだ。

私は、昭和十二（一九三七）年六月十九日に満州国奉天（瀋陽）市紅葉町十九番地で生まれた。父は、昭和十一年四月、土木建築業の大倉土木株式会社（現在の大成建設株式会社）に入社したが、翌年三月には「お前は元気があるから、これより三日以内に満州に転勤」と命ぜられて渡満した。

奉天市大和区浪速通りにあつた満州大倉土木株

式会社に勤務することになり、母はいつ生まれるか分からないような大きなお腹を抱えて、父について奉天に来て、私を生んだのだつた。

奉天には約二年いたが、父の専門の建築技術の關係から、当時東滿地区と呼ばれていたソ連との国境線に近い、東安省密山東安に移転となり、昭和十四年六月に母の背におぶられて奉天を離れ、新密山に向かつた。

満州国が昭和七年三月一日に誕生してから、交通網は大分整備されてはきたが、それでもまだまだ時間のかかる旅であつた。新密山は奉天を出発、新京（長春）を経由して牡丹江に行き、そこから虎林行きに乗換えて、目的地の新密山に到着するのに丸一日半もかかる奥地であつた。それでもこの時間で行けたのは、満鉄の運行管理が適切であつたからである。

東安市は、満州国の中でも比較的新しい新興都市で、昭和十四年六月一日、東安省の設立と共に新密山街から東安街と変わり、省の公署所在地

となり、東満国境地帯を含めて対ソ国防上の要地ともなっていた。

東満地区を縦断する鉄道は、図們から牡丹江を経て佳木斯に至る鉄道のみで、密山・虎林方面に行く鉄道が無く、関東軍は満鉄に対して国境警備の重要性から、林口から密山を経由して虎林に至る虎林鉄道の建設工事を要求し、突貫工事で昭和十二年十一月に完成し、営業を開始していた。

この建設工事に関連して、会社は密林線工区工事及び密山駅、機関庫工事などを施行していた。鉄道が開通すると、開発工事が活発化して忙しい状況になった。そのようなことで、父は密山県東安作業所に配属になり、東安及び虎林などの工事現場を動き回った。

昭和十七年一月一日、満州国建国十周年の記念に東安市となった。人口四万八千人、そのうち内地人九千三百六十九人が生活していた。私の幼い頭の中にうっすらと記憶の残るころには、東安市の生活も残り少なくなってきた。家族の生活場所

は市内の中心地ではなく、東安駅に近い資材置き場で、社宅と倉庫が塙で囲まれているような場所だった。

#### 一 東安市での生活

家族が生活していた住居は、レンガ造り平屋の四家族連棟式で、そこに三家族が生活していた。道路に面したところは倉庫棟が配置され、門には守護所があり、そこには私を可愛がってくれた李さんと、「黒」という名の雑種の大型犬がいた。学校から帰るとすぐに、李さんの所に遊びに行っていたが、目的はおいしいマントウを蒸籠でふかして待つてくれたことと、黒と遊ぶためだった。

一度好奇心から倉庫の中に入ったが、驚いたことにその倉庫は資材倉庫ではなく、食料品倉庫で「塩鮭」が山と積まれていた。そうとは知らず食べたくて母に話をしたら、父に知れて、「あれは日本人が食べるものではない。猫またぎと言って現場の工夫に食べさせるものだ」と言ってこっぴどく叱られた。その意味がよく分からずじまいの

まま、あるとき李さんに話をしたら「会社からもらったのがあるから」と言って焼いてくれたので食べた。結構おいしかったことを覚えている。また一つ、大人の言う意味が理解できずに味だけが体に残った。もう一つ、これは母が作ってくれた「水餃子」。これも体から逃げて行かず、私の好物となった。

中華というと、家族で食べた東安ホテルの中華料理も大変においしかったが、やはり李さんのマントウ、母の水餃子、これが一番であった。

昭和二十年四月には東安在満国民学校二年生になり、学校生活にも慣れて、今日本が戦争し、毎日本土が爆撃されていることなどは知るよしもなく、運動会などで「鬼畜米英」などと掛け声をあげていたものだ。

長い満州の冬の季節も何とか明け始める兆しが見える時期となると、学校から家に帰ると予習・復習・宿題などにはお構い無しで、ランドセルを放り出しては日が暮れるまで外で遊んでいた。

東安市の治安は良く、登下校については上級生の指導に従い集団で行動することぐらいで、別段の注意も無く寄り道もよくしたものだ。それだけ市内は落ち着いていて、日常生活に対しては何の心配もなかった。

しかし、昭和十九年秋ごろまではよく街で見掛けた日本軍の兵隊さんの姿はすっかり見掛けなくなり、東安市で集団の兵隊さんを見たのは、十九年秋に市中心街で実施された、戦争を伴った市街戦の演習が最後ではなかったかと思う。

東安市はソ連との国境線も近く、対ソ防衛戦略地域としての位置付けから、昭和十八年、関東軍からの大規模な兵力抽出の始まるまでは、密山県、半載河には第三国境守備隊、興凱湖の北西岸の廟嶺に第十二国境守備隊、東安市には第五軍司令部があり、第二十四師団が配備されていた。

隣の虎林県には第十一師団が、虎頭には第四国境守備隊が配備され、虎林線に沿って配置されていた開拓団の皆さんも安心して生活していた。し

かし、いつの間にか守備隊は改編になり、師団は知らない間に姿を消していた。

東安市配備の第二十四師団は、昭和十九年末に台湾軍に、虎林配備の第十一師団は、昭和二十年三月に本土決戦用として四国に抽出されていた。

虎頭にだけは第十五国境守備隊が配備されていたが、第五軍司令部は掖河に後退していた。その後、各部隊からの寄せ集めと、根こそぎ動員による召集兵からなる第百三十五師団が七月三十日に編成を完了し、東安市に配備されて、対ソ国境約四百キロメートルを担当したが、定員不足と装備の未充足の師団であった。

## 二 昭和二十年の五月ごろ

この季節になると、草原には花が咲き始め、気温も上がってきて気持ち浮き立ってくるのだが、この年はそうではなかった。私の家にもくるものがきたのだ。満州に住む四十才までの男子に対して、根こそぎ動員が行われた。父は三十五歳で、会社では働き盛りの歳であったが、兵隊としては

老兵の部類に入ると思うが、召集令状がきた。赤紙には「三日以内に佳木斯歩兵連隊に入隊せよ」とあり、慌ただしく東安駅より出発して行った。

家から父の姿が消えると、不思議な気がした。昼食時に現場から昼食に家に帰って来たときなど、いつも夜が遅い父と顔を合わせるのはこのときだけなので、すぐに「勉強をしろ」「成績が悪いぞ」などと怒られて、一発の拳固で殴られ、次の二発目にはすぐに裸足で逃げ出して、太陽が傾くまで外で遊んでいたのだが、それがなくなった。

二月ごろのことだったと思うが、父の友人で虎林部隊の八木中尉が東安の師団司令部に出張の折りに、家に立ち寄った。父と飲みながらの話を襖ごしに聞くとともに聞いたが、「本土も空襲でやられており、南方方面も苦戦が続いている」とか、また「この現状では満州も危なくなると思う。どうなるのか分からないが、家族だけでも日本に返した方が良いのではないのか」と話していた。

私には、八木中尉が腰に軍刀を下げ長靴を履き

敬礼姿が立派で、大変に格好の良い軍人さんである印象を強くしていた。「危ない」「何が危ないのか」を考えるよりも。

何よりの楽しみは、お土産にキャラメル、羊羹、缶詰などをたくさん持って来ることであった。八木中尉が言った「満州が危ない」との真意は、一部の人にしか分かっていなかった。

父の召集により、残された家族は母ミヨ（三十三歳）と義正（八歳、小学校二年生）、弟秀敏（五歳）、妹慶子（四歳）の四人となった。

入隊から約一カ月が経ったころきた父からの手紙には、「毎日毎日、訓練で頑張っているので心配するな」とあり、さらに「一カ月ぶりに家族との面会許可が出る」とあった。母は虫の知らせか、面会日には何が何でも佳木斯に行くと言って、親子四人で出掛けることになった。

東安市から佳木斯までは約三百五十キロメートルあり、これは大変な旅だと考えたが、これが母と父との最後の面会になるとは夢にも思っていない

なかった。車中で一泊して、佳木斯歩兵第三百六十七連隊内で他の家族と一緒に父と面会した。妹の慶子は父に抱かれ、最後まで抱きついていった。

慶子は、この強行軍の旅で帰りの汽車の中で風邪をひき、その風邪から肺炎を併発し、東安省立病院に急遽入院したが結果は思わしくなく、看病のまいなく七月一日に死亡した。

急激に容体が悪くなり亡くなった妹のため、社宅の人たちの好意でささやかな葬儀をし、何となく慌ただしい月始めとなった。

母は強行軍の旅が原因で死なせてしまったと思ひ込み、毎日遺骨にお線香を上げて「慶子、ごめんね」と念仏のごとく唱えていた。

何かしら不安と緊張が高まっていく中で、日常生活は変わりなく、市内の治安もいたって平穏であった。東安市は、広漠とした草原にできた街で急速に発展していて、昭和二十年ともなれば都市としての機能はほとんど整っており、陸の孤島と言われた密山街にも駅からの定期バスが運行し

ていて、途中には蓮花泡湖という湖があり、その先には河があつて自然を満喫したが、これといった観光地は無いが住み良い街であつた。

毎月八日は「大詔奉載日」で、満州各地の官庁、学校などでは行事があり、軍隊でも一部は休日扱いであつた。八月八日、私は学校登校日なので勇んで家を出たが、その日はいつもと違って飛行機の音が激しく上を見ると、暗色をした戦闘機が低空を飛んで行つた。東安市では飛行機など見たことが無いので、変だなと思つた。私が見た飛行機は昨年秋の遠足で、東安市郊外の東安飛行場見た戦闘機が最後だつた。今日のは変な色の飛行機だと思つていると、一瞬だつたが翼に赤い星らしき印があるのを目にしたが、別に気に留めずに登校した。

学校では全校生徒が校庭に集合し、一連の行事を終了し、教室で紅白の饅頭を頂き解散となり、校門を振り返り帽子を取つて礼をした。これが東安在満国民学校の最後になつた。

学校から帰つてすぐに母に飛行機の話をする、  
「何を言っているの！」と叱られた。家族三人で夕食を済ませ、就寝した。

翌八月九日、東安市民は今日も何事もなく日常生活が始まると思つていた。市内の上空に早朝の五時ごろから飛行機が数機通過して行つたが、さほど気になどしていなかつた。満州大倉土木の東安営業所に、明け方「九日未明ソ連邦より宣戦布告をされる」との報が市公署工務科より入つてきた。営業所の山川所長は、情報の事実確認のため方々に連絡したが、どこも混乱状態であつた。午後になり市公署より「老幼及び婦女子は一時牡丹江へ避難するにつき、至急身の回りの物と食糧四、五日分を用意して指定の場所に集合のこと。集合場所は追つて指示する」との指示があつた。

また「在郷軍人や壮健男子は居残り、指定の部署の警備につけ」という命令も出たが、部署の指示はなかつた。最悪の場合を考え、営業所の整理と同時に社宅入居者である守屋、鈴木、野中の三家

に対しても、身の回りの物と二、三日分の食糧を準備して、指示があるまで自宅で待機せよとの指示が出た。会社からの指示ではあったが、一時の避難ぐらいですぐに戻ってくる程度ぐらいにしか考えていなかった。夕方に、母は営業所に呼ばれ、所長より現状の説明を受け、「ソ連軍が国境を突破して侵攻して来たが、関東軍が押し戻すまでの一時、牡丹江まで避難する。いつでも動けるようにしておくこと」という内容であった。母は営業所より戻ると、手荷物の点検とお握りの段取りをして、指示がくるのを待った。しかし指示は無く、時間のみが経過していたので、母は子供にこのまま寝ていなさいということで横になったが、寝つかれなかった。

市公署では、軍の意向で籠城か脱出かを検討していたが、九日の午後になって第百三十五師団が東安市を撤退するとのうわさが流れ、その時点から市公署は東安市を放棄するという流れになっていたが、一般市民には何の情報も連絡も無かった。

### 三 東安からの一時避難

午前二時過ぎ、営業所に市公署よりの伝令があり、「残留者は午前二時までに各部署の在郷軍人会に集合し、避難を開始する」との伝言であった。時間を確認すれば指定の二時はとくに過ぎていたが、所長は再度確認のため在郷軍人会のある会館に行くと、会館前に約十五人ぐらいの人が集まり指示待ちをしていたが、結局は何の連絡も無かった。

午前四時まで待ったが、これ以上待つのは不安が増すだけなので、集合している人たちと相談の結果、一応解散し戻ることになった。途中、東安駅に向かって急ぐ人たちが多くなっていた。

営業所に戻って再度確認したが、連絡なしのことですぐに社宅に待機している家族に「列車で避難をするので、東安駅にただちに集合」と伝えて営業所を閉鎖し、後のことは満系の常備の人に頼んで山川所長も駅に向かった。

東安市はソ連軍の侵攻より二十四時間以上が経

過したが、市内への爆撃など無かったが、街は騒然となっていた。私たちの住む社宅街は不気味なほど静かだった。

空が明るくなりかけた五時少し前に、避難の指示を受けた。母と私はリュックサックを背負い、両手にも荷物を持ち、母は慶子の遺骨を首より掛けた。母は、慶子を一人留守番させるのは可哀相だから一緒に連れて行くと言うので、私は「どうせ帰って来るんでしょう！」と言ったが、母は無言だった。

親子三人が家を出たのは、五時を過ぎていた。社宅の門を出るとき、李さんと黒に一目会ってと思い守衛所を見たが、人影は無かった。駅に向かって急いでいたので、東の空が黒くなっているところなどには気がつかなかった。後の話だが、そのころ私立病院、関東軍倉庫、兵舎、市公署、郵便局などから煙が上がっていた、と大人が話していたのを聞いた。

東安駅構内は避難列車に乗車ができない人であ

ふれ、騒然となっていた。構内の引込線には、大量の無蓋車と、一部有蓋貨車が連結された列車と、避難民を満載した列車が停車していた。虎林から東安駅に着いてそのまま停車している列車もあり、どれが最終避難列車なのか指示もなく、乗車できない人たちが殺気だち、だれがどこにいるのか探せる状況ではなかった。

六時半ごろにやっと乗車命令が出たので、ホームで待機していた人々が一斉に引込線に待機していた無蓋車に走り寄り、列車はすぐ満員になり、私たちもだんだんと押されて、最後の職員乗車の貨物車にやっと乗ることができた。乗車完了次第発車すると思っていたが、発車する気配は無く、しばらくはそのまま待機していた。やっと三列車の内の一列車が汽笛を鳴らして東安駅を出発したが、この列車は軍・官の家族が多く乗車していたようだった。発車する気配がないまま黙って貨車の窓より駅舎を見ていたら、駅舎の中で缶のような物を持って動いていた人が見えなくなると同時



に、駅舎の中が真っ赤になり、赤い帯状の炎が軒裏をはって屋根を包んだ。確か七時ごろのことだった。母からは、「一時避難」と聞いていたが、街を焼き目の前では駅が燃えている。まして父の会社が作った駅舎まで燃えているのを見て、この街には二度と戻ることはないのだな、と子供心にも鮮明だった。

しかし乗車してから約一時間近くなるのに、依然として列車は発車しない。やっと乗れた人たちも、しびれをきらして「なぜ発車しないのか！」と騒ぎだした。すると、列車の前方で突然爆弾が破裂したような音と、すさまじい地響きがあった。ソ連軍が侵攻して来ても、鉄道を利用できないようにするため、線路を破壊したのだと思った。進行方向の破壊では、この列車は発車できないと騒ぎが大きくなり、確認のため何人か降りて行った。実際はその爆発は線路破壊でなく、爆弾処理による爆発であった。私たち家族が爆破の現場にいないが無事だったのは、最終乗車した避難列車が連

結予定の列車で、爆破地点より離れていたからだった。

小便はしたくなるし腹は減るしで、とうとう列車を降りた。周りの人たちは、「朝出て行った列車は、ソ連機の機銃掃射で、運行不能になり、多数の死傷者がでたらしい。列車での避難はだめではないのか」と話していた。腹も空くはず、午後一時ごろになっていた。

避難列車の脇を、大声で「列車での南下は不可能になったので全員下車せよ！」と叫ぶ伝令が走ってきた。伝令の説明によると、「十三日早朝までに勃利に行けば、牡丹江行き最終列車がある。強行軍であるが、これより徒歩で勃利に行く以外、南下の方法は無い」とのことだった。

午後二時過ぎに、倉持利平東安市長を先頭に約二千人の集団が、長野開拓団部落を経由して開拓団部落道路に沿って、十三日勃利到着を目標に延々と列をなして東安駅を後にした。歩き始めてから雨が振りだし、道は悪くずぶ濡れで泥んこと

なった。夜になってもやまず、暗闇の中を休み無く歩かなければならない。母は大きなりュックサックを背負い、首からは慶子の遺骨を抱いて弟の手を引いての強行軍であった。東安駅出発時に会えた山川所長、鈴木さん一家と一緒だったので、李さんがいないので聞いたら、爆破事故で死亡したとのことだった。

夜を徹し歩き続けた。明け方近くの小休止に、母は「慶子には可哀相だが、これ以上は無理」と判断し、母が大事にしていた綿紗の着物に遺骨を包み、名もない小さい池に親子三人の手で沈めて、慶子と別れた。

前の方から、街道を歩くのは危険なので山中をいくとの連絡があった。昼近くになり、平らな洞窟のある場所で小休止したとき、「駅爆破の惨事に遭った人はそのまま放置されたが、その中に小学生がいたとか、混乱の中で生き別れになった人もたくさんいた」というような話があった。

出発の命令が出て動きが鈍く、列の間隔は開

くばかりだった。後ろの方から「頑張れよ！」という声があったので振り返ると、兵隊さん三人が声を掛けながら早々と私たちの脇を通り越して行った。

東安を出発し二日目に、道路の溝に横転している軍用トラックがあり、荷台には「カンパン」と「砂糖」が放置されていた。皆で分けて食べ元氣を出し、正午ごろ東安より約百数十キロメートルあたりに位置する桃山開拓団の部落に到着し、小休止となった。

これから勃利まではまだ五十から六十キロメートルあるとのこと、部落を出発して大分歩いたころに、後方から来た軍のトラック二台が子供、婦人を乗せてくれた。しかし男の人は乗せないで、そこで所長さんたちとは無事を誓い合って別れた。

トラックに乗せてもらったお陰で、何とか勃利に十二日の夜に着き、駅に行った。奥地からも、たくさんさんの避難民が勃利を目指して集まって来た。武装した警察官が食糧の調達と焚き出しをして避

難民に配っていたが、これも十二日の夕方最後まで最後  
の時期を迎えていた。

午後九時近く、避難列車に何とか乗ることができた。乗れない人がたくさんいたが、その人々は勃利在満国民学校に集合し、十三日の最終列車に乗ることになった。所長さんたちもその後トラックに乗せてもらい、夜中に無事に勃利に着いた。

しかし、十三日の最終列車は発車されず、全員徒歩で林口経由牡丹江に行き、そこからハルビン、新京に避難した。その人数約五千人ということだった。

私たちの乗った列車も前進ができずに、林口手前の亞河駅付近でソ連機の攻撃に遭い進行不能となり、列車を放棄して徒歩で林口を目指した。十二日夕刻には、林口郊外までソ連軍が侵攻しているとの情報があった。亞河駅付近から黒煙が上がっていたので、駅には近付かず街道をそれて間道に入り、牡丹江を目指した。間道と言っても山道で、この地域は森林山岳地帯で、雑木が密集し自

然木の倒木があり、婦女子、年寄りなどは大変であった。

やっと日が暮れる前に小さい開拓団部落に着いた。部落の人は既に避難していて、空き家になっていた。その前で、兵隊さんが三人で鍋を囲んでいた。これから豚を殺して鍋にするとあって、開拓団の放置した豚を銃で撃ち殺し、鍋にしたのを食べた。夢中で食べていたのでよく分からなかったが、兵隊さんの話では、「日本が負けた」だったが、皆は食べることに夢中で反応がなかった。その夜は、屋根のある所で兵隊さんと一緒だったので、安心して早々に寝た。

朝起きたときには、もう兵隊さんの姿は無かった。避難民と一緒に足でまといになると思い、早々に出発して行ったようだ。ここで立ち往生はできないので、牡丹江省の二道河子を目標にして歩き、野宿を重ねながら四日ぐらいかかって到着した。なんでも、この地帯は満州でも有数の木材生産地で、この部落には日本の会社の製材所があ

り、木材運搬のための林業鉄道の駅もあった。

ここまでの食糧は、東安出發より持参の食糧は三日分ぐらいなので既に無くなり、軍の放棄したカンパンと開拓部落の残り物、無断で畑から取ったトウモロコシと芋などで食いつないで、何とかたどり着いた。

二道河子では日鮮系民の人たちの炊き出しの高梁飯を食べた。お腹を空かして皆と粗末な小屋に入った瞬間、目の前に大きな木製の台の上に、箸とお碗が並べてあった。その脇の大きな釜の中には、お汁粉が湯気を上げていた。お碗と箸を取ると、釜の側にいたおばさんによそってもらった。お碗の中は色も形もお汁粉だった。口に入れたときの味は、小豆色をした流動食であったが、喉を通るときは砂糖が入っていないお汁粉だったと思っただ。母に、お汁粉に砂糖が入っていないかと思った。と話す、「お汁粉でなく高粱ですよ」と言われて、後の言葉は飲み込んでしまった。後から思えば、高粱など日本人が食べるものではないと言

たかっただと思うが、言えないほど有り難い思いで食べたのだと思う。あのときは、お汁粉であった。

食事が終わり、すぐに東安組の消息を聞き回したら、大倉組を見たという人がいたので探すことにして、少しここに止まることにした。探してみたら、東安組の人はいたが大倉組の人たちの消息は不明であった。ここで留まるか、先に進むかの決心をせまられた。

#### 四 敗戦を知る

ここにたどり着いた人たちはよくここまで来たと思っていたが、まだ先があった。そんなときに、小型飛行機がビラをまいていった。拾った人の話では、「八月十五日に日本は降伏した。ソ連軍に投降せよ、第五軍司令官」と書いてあったが、だれ一人として日本が降伏したなどと思う人はいなかった。牡丹江は関東軍が死守しているが、二道河子と牡丹江の中ほどで満軍が反乱をおこし戦闘中なので、牡丹江への南下は危険と伝えられた。私たちは、森林鉄道に沿って横道河子に向かう

班の人たちと一緒に、二十六日に歩き出した。二十九日には森林鉄道の二二里線の駅に着いたが、近藤林業の部落には、避難民がいっぱい集まっていた。これから先の情報がかめず、前進を見合わせて後続の人たちを待つことになった。この先の十里線駅にはソ連軍が侵攻しているとの情報があり、このまま前進は危険なので後続と前後処置を取るため待機となったので、ここで大倉組の人たちを探していたら、所長も私たちを探して再会することができたが、他の家族の人たちとは再会できなかった。なにせこの場所は山中で、部落と言っても森林伐採者のための部落で、食糧も無く、日が落ち始めると八月の末でも気温は低く、一段と寒さを感じた。

夕刻に、駅前集合の命令で大勢の人たちが集まった。これから先どうすれば良いか、先導の幹部たちが協議した結果の伝達があり、三案の行動方針が示され、個人の選択を求められた。一案は「危険覚悟でヒスイ線（ハルビン―牡丹江）を突破し、

南下する」、二案は、「白旗を出し降伏をする」、そして三案は「今しばらくここで残留し、様子を見る」。以上の三案であったが、今夜よく自分の行く道を考え、明日早朝三案ごとに分かれて集合して出発するとの申し合わせであった。母の考えは、「せっかくここまで親子が生き延びてきたのだから、父に会うまではこれ以上の危険はできない。何としても生き延びるには、第二案しかない。捕虜になっても何とか生きる道もでてくるだろう」ということで、山川所長にも相談したら所長も同じ考えで、白旗組に参加することになった。

翌日早朝より駅前に集合し、各自が選んだ道を確認し、お互いに無事を祈った。真っ直ぐ伸びた線路の脇を、何もは入っていないリュックサックを背負ってもくもくと歩いた。十二里線駅で日が暮れて、野宿となった。東安を脱出してから二十一日目の夜であった。

九月一日、早朝より駅前に集合し、待機していたが、前方を偵察した結果、木材運搬用のケーブ

ルカーの下にある十里線駅にソ連軍が駐屯している模様、とのことであった。これからの前進は、降伏を覚悟の前進であった。十里線駅に下りるとソ連軍兵士に囲まれ、一方的な勧告で、捕虜の扱いで全員拘束された。すぐにその場で身体検査を受け、全員が収容所に連行された。このときをもつて避難行動は終わったが、これからはソ連兵に追い立てられて行動することになった。どのくらい歩かされたか覚えがないが、広い道に出た。

そこは牡丹江に通ずる国道で、国道の両側には牡丹江方面に行く難民の列が延々と続いていた。そのとき、国道の真ん中を、黒い固まりが土埃とすさまじい轟音と地面を揺るがす振動を上げながら、次々と私の前を走り去って行った。見上げると、小山のようなソ連軍戦車（T-34、重量三十二トン、主砲口径八五ミリメートル）だった。戦車の上には大勢のソ連兵が乗り、長い砲身を突き出し、横道河子に向かって物すごい土埃を上げながら走り去って行った。こんなでっかい奴と戦

争しても、勝てるはずがないとそのとき理解した。母に呼ばれて走り出したら、マンドリンの形に似た自動小銃を持ったソ連兵に追い立てられながら歩いている人が、「八月十五日に日本は無条件降伏をした」と話しているのが聞こえた。二道河子のピラは本物であったことを改めて思った。

途中、野宿に近い状態で一泊し海林に着き、そこで男子と婦女子は分離されたので、山川所長と別れ別れとなった。

私たちは海林街の拉古収容所に収容されたが、そこは以前学校の体育館だったようで、屋根と板壁があるだけで窓にはガラスも無く、床は剥がされて土間がむき出しになっていた。それでも野宿よりはましで、日中は天気が良いれば気温も上がるが、夜になると気温が下がり、衣類とは言えないボロ布をまとっているだけだったので、寒さが身にしみた。食べ物は何を食べていたのか覚えがない。

収容所に入って、妊娠していた母は流産してし

まった。母は自分で処理してどこかに埋葬した。そんなことから体力が一段と落ちていたようだった。拉古収容所に収容されてから約一カ月が経過したが、環境、待遇は最悪で、その上寒さは一段と厳しくなってきた。

帰国について収容者代表がソ連軍と交渉をしていたが、あまり進展が無いとき突然、「南満州地区に家族か知人がいて、南下希望する者は避難列車を運行するので至急申し出ること」と発表された。体調の悪い母もここに留まることは何の利も望めないので、移動を申し込んだ。最悪の場合は病人としてとり残される危険もあるので、無理を承知で最後の班で牡丹江の収容所に移動をした。牡丹江の収容所には南下の順番待ちの避難民が大勢収容されていて、いつ南下できるのかは定かでないかった。

やっと十月十六日早朝、出発のため牡丹江駅に集合の命令が出た。

## 五 新京で母死す

乗車の指示に従い無蓋車に乗り込み、海林、横道河子を経由の途中、何回も停車しながら十八日の早朝にハルビン駅に到着した。これよりの南下は列車の段取りが付き次第とのことで、駅前は東満、北満からの避難民でいっぱいであった。

ソ連軍から、夕方に列車を出すとのことで駅構内で待機したが、列車が出たのは翌日となった。何とか新京駅に到着したが、これからの南下は当分見込みはないとのことで、知人のいる者、頼れる人のいる者は、自由行動をとること、他の者は日本人会指定の収容所に入ることになった。日本人会から、奉天行きは当分見込みがないので、収容所として室町小学校に入るように示された。

二、三日過ぎたころ、山川所長が南下組の中に東安組がいるのではないかと探しているのに会い、再会した。所長が大倉土木新京営業所に厄介になっていたので、私たちもそこに行くことにした。営業所は入船町二丁目にあり、そこには社宅もあった。事務所は閉鎖されていたので、社宅を

訪ね今までのことを説明したら、東安からは所長と鈴木さんだけで、他は不明である、齊々<sup>チチ</sup>ハル<sup>ハル</sup>面からの避難者も新京には到着していない、情報がかめず大変心配をしていたとのこと。

佐川さんのお宅で、南下ができるまでお世話になることになった。東安市脱出以来、七十三日ぶりで畳の上で寝ることができた。

入船町社宅は、満鉄附属地の開発初期段階からの住宅街で、整然と区画されていた。社宅は、佳木斯より避難して来た家族、その他四家族が各社宅に分散して世話になっていて、小学二、三年生とか、まだ入学していない子供が結構いた。私と弟も学校はないが友達ができてよく遊んでいたが、母は日に日に衰弱して顔色が悪くなり、発熱をするようになった。周囲の人たちも心配して様子を見ていたが、悪化するばかりでこれ以上は無理と判断して、病院を何とか探していただき、入院ができた。病名は発疹チフスと聞いた。収容所でたくさんの人が亡くなった病気だったが、母は病院

のベットで寝ているから助かると思っていた。

毎日弟と見舞いに行くのが日課になり、十一月七日には、いつ最悪の状態になるか分からないからと、弟と付き添いをするようになった。八日の朝は、容体の変化が無いので、社宅に報告と朝御飯を食べに帰り、そのまま遊びに出たが何となく気になり、病院の裏口の階段に足を掛けたとき、微かに線香の匂いがしたような気がした。病室に入ったなら、母の頭の前の台に一本の線香が立っていて、顔には白い布がかぶせてあった。その晩に社宅でお通夜して頂き、形見に髪の毛と爪を渡された。

翌日、会社の人たちで入船町の営業所の二階で葬儀をしてもらった。棺桶は材料を探し出して作り、蓋を閉め最後に小石で釘を打ちながら、避難して来る途中で見たたくさんの死んだ人はそのまま見捨てられていたのに、母は良かったとしみじみと思った。母は享年三十三歳だった。大八車に乗せ、指定された大房身共同墓地に（新京競馬場



の裏方)に埋葬した。

孤児になった私たち兄弟は、皆さんの相談の結果、避難担当者の子供として日本に連れて帰ることとなった。この時点で父の手掛かりはまったく無く、生死も不明であった。このころになると避難民の移動は制限され、動くことができず情報が無いのが現状であった。

#### 六 叔父との再会

ちようどそのころに私の叔父の佐々木が、私たち家族の消息を尋ねて会社に訪ねて来た。叔父は満鉄に勤務していて、開戦時には連京線の鉄嶺機関区で機関士として勤務していた。ソ連軍の侵攻時には避難列車の運転勤務を命ぜられ、九月末に解放されて十月に叔母が避難していた蘇家屯にたどり着いたそうである。そこで蘇家屯機関区の機関士として乗務しながら、奉天に出掛けるときに大倉土木の本社に、私たちの消息を確認していた。再度確認したときに「東安市より避難をしてきて、新京営業所で保護している。母親は死亡し、子ども

も二人は健在である」と判明した。

十一月二十七日に、叔父が瀋陽より私たちを引き取りに来た。お昼少し前に、私たちに事務所に来るようにとの伝言があったので事務所に行くと、満鉄機関士の服装をした叔父が立っていた。叔父は、二十年の始めに出張で東安市の我が家に一泊したことがあり、顔は覚えていた。叔父の運転予定の、夕方に出発する奉天行きに乗るため、大変お世話になった会社の人たちと山川所長に挨拶をして、新京駅に向かった。駅舎では、職員専用通路から、引込み線に待機している機関車の運転室から石炭庫の脇の水槽タンクの上に、筵をかぶって出発まで隠れていた。

機関車は貨物列車を連結して、夕方新京を出発した。親子三人が新京に着いたのが十月二十一日、それから三十七日間の生活であった。機関車は引込線より本船に入り、左に曲がったときに右を振り向くと、その先に母が眠る大房身が微かに見えた。そのとき汽笛が鳴り、煙突から吹き出す煙は

火柱となっていて、線香の煙のように見えた。

翌日奉天に着き、そこで貨車を切り離し、機関車のみ約十五キロメートル先の蘇家屯機関区に着いた。叔母の兄さんも満鉄勤務で、みんなが社宅で生活していたので、そこで佐々木の子供として引揚げまで生活することになった。社宅は小高い場所にあり、鉄筋コンクリート造りの二階建てで、社宅には私たちがぐらいいの子供がたくさんいたが、学校が閉鎖されていたので行く場所がなかった。社宅の下が公園になっていて、その先に元の蘇家屯警察署があり、そのころは八路軍が駐屯していて、よくそこに遊びに行った。叔母にお願いして売り台と煙草を段取りしてもらい、街の市場に立ち売りに行ったが、国府軍、共産軍内戦の激化により市場に出入りができなくなり、中止となった。

#### 七 引揚げ・新しい生活

六月になると引揚げの順番がきた。六月四日の早朝に社宅の庭に集合し、蘇家屯駅から奉天の指

定された収容所に移動した。二日ぐらいそこに滞在し、無蓋車で錦県に向かい、十三日には最終地の葫蘆島に着いた。

六月十六日に最終検査を受け、佐々木の子供として興安丸に乗船し、葫蘆島を離れ日本に向かった。東安を脱出してから三十日の日数が過ぎていた。五人家族だった私たちは、一年足らずで弟と二人だけになっていた。

六月二十一日に舞鶴港湾内に着いた。二十四日に上陸し、引揚者施設に収容され、そこで頭の天辺から爪先までDDTの白粉で消毒され、屋根のある客車に乗り、伯父の実家であり父の実家でもある岩手県一関に向かった。

この時点では、父の生死は不明であった。

一関厳美溪で二日間ほど世話になり、それから父の実家である一関山目で世話になった。父の実家は農家で伯父、伯母、従兄弟、従妹の六人家族であった。学校に転入する手続きで伯母が学校に行ったら、約一年近くも休学していたので二年生

に編入された。私としては自分の都合で休学をしたのではないので、三年生に編入ができないなら学校に行かないと申し出たので、伯母は困って再度学校と交渉した結果、山目小学校に三年生として七月始めに編入されることとなった。

学校生活にも馴染み、初めての稲刈りの手伝いも経験した。

十一月末には、ハバロフスク市より一枚のハガキが届いた。父からで、「無事である」という簡単な内容であったが、これで生死が判明し、みんなほっと安心した。

昭和二十二年一月には、ナホトカ港にいるので帰る日が近いとのハガキが届いた。

父は昭和二十一年十月にはナホトカ港に到着したが、本年の最終船が出発したため、翌年の五月までは雑用をしながら生活をして五月二十日ナホトカ港を出発し、二十五日舞鶴港に入港した。舞鶴で会社の社員に出迎えられて東京に向かったが、途中で大倉土木は解体し大成建設という会社に生

まれ変わったと聞かされて、大成に入社をした。東京で生活基盤ができ次第迎えに行くということになった。これで孤児にならずに済んだ。

戦争の恐ろしさは満州で経験したが、内地では自然災害の恐ろしさを体験した。

昭和二十二年九月十四日、カスリン台風により一関一帯、大水害が襲った。北上川に注ぐ磐井川が逆流し、二階の床下まで洪水が迫り危険となり、神社に避難をした。また昭和二十三年九月十六日のアイオン台風も磐井川上流部の崖崩れにより土砂の蓄積と、その崩壊による鉄砲水により、一関の孤禪寺付近で氾濫し、死者五百余人、流出家屋六百戸以上の大災害になり、同級生も亡くなった。

昭和二十四年一月に父が迎えに来たので、世話になった伯父や伯母、従兄弟そして同級生などに見送られ、山目駅を出発した。上野駅で乗換えて、荒川区尾久町に行くために、京成電鉄上野駅に向かった。地下道を通ると浮浪者がたくさんいて、東京は大変な所と思った。

新三河島駅より歩いて二十分の所に、父が一人で作った小さい家と新しい母がいた。私と弟は荒川区立赤土小学校に五年生と二年生で編入した。尾久には四年間ぐらいいいて北区中里に移転し、そこが私の出身地となる。

昭和三十五年に学校を卒業し、物は壊すより作る方が良いと思い、父と同じ会社に入社した。この時点で家族は六人になっていた。入社と同時に大阪支店配属になり、そこを振り出しに、東京、横浜、新潟支店を回り、東京本社を最後に定年退職をした。

父とは最後まで満州の話はしなかったが、ハバロフスク抑留の話はよくしていた。

平成五（一九九三）年九月に、母と慶子の五十回忌をしたことは何よりと思っているが、ただ一つ残念なのは、弟が病死して参加できなかったことである。父も平成十三年九月十一日、九十一歳で永眠した。

あれから六十数年が経った。あのと時の話がで

きるのは、叔母だけになってしまった。

平成十九年四月に初孫が小学校に入学となり入学式に参加したときに、子供たちが戦争で勉強ができなくなるような事態は、絶対につくってはいけないと思った。